OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Axel Honneth, "Kritik der Macht : Reflextionsstufen einer kritischen Gesellschafstheorie", Suhrkamp, 1983
Author(s)	宮本, 真也
Citation	年報人間科学. 1992, 13, p. 189-193
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9629
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

Axel Honneth

Kritik der Macht

Reflextionsstufen einer kritischen Gesellschafstheorie

Suhrkamp, 1983

宮本　真也

アクセル・ホーネットは、フランクフルト学派の第三世代に属する新進気鋭の社会哲学者である。ホーネットについては、通例ハーバマスの同調者として「ハーバマス学派」というレッテルを貼られていることぐらいしか知られておらず、「フランクフルト学派」というレッテルとの関連さえ定かではないのが現状である。本著に対する私の関心には、この現状に対する反省に加えて、ハーバマス以降の研究者への期待が働いている。アドルノから西欧的批判精神を継承し、彼を乗り越えようとするハーバマス、この知的克服の伝統はホーネットにも期待されて当然である。

この本の魅力は何よりもそのテーマにある。七〇年代以来大きな影響を与え続けている二人の社会理論家、つまりミシェル・フーコーとユルゲン・ハーバマスの知的営為を、「批判理論によって明らかにされた問題設定の競合的な継続（S.7）」と見なすという前提からホーネットは始める。「フーコーとフランクフルト学派」という問題は、両方の立場を充分に汲み尽くした議論がほとんど存在しないゆえに[1]、まだまだ多様な議論の余地の残された問題である。以下、ホーネットのホルクハイマー、アドルノ批判を追ってみよう。

初期ホルクハイマーの学際的唯物論の構想は、資本主義的な自然支配課程の研究を、個人の「欲求の社会化」を探る精神分析学で補完する、というものだった。ただしこの構想は、ホーネットによると一種の機能主義に陥ってしまう。ホルクハイマーもその予防手段として、個人の欲求の社会化と資本主義的システムという次元の間に、文化という次元を設定する。しかし、この文化という概念をホ

ルクハイマーは行為理論的にではなく、制度論的に「文化的装置」として捉えてしまう。その結果文化は、青少年に対しては現存する社会の制度に適合させるような「社会化」のための手段として、成人にとってはその制度からの逸脱を規制する外的な「超自我」として、機能する装置と解釈されてしまうのである。こうして三〇年代のホルクハイマーは、「社会的なもの」を目的合理的な資本主義的なシステムに還元してしまう。この還元主義的な傾向はパースペクティブの狭隘さという欠点は持つものの、学際的唯物論という構想に全面的放棄を迫るものではない。だが、ホルクハイマーはこの構想を完全に放棄してしまう。その社会哲学的な転回点が、アドルノとの共著、『啓蒙の弁証法』[2]だとホーネットは考える。

戦後のフランクフルト学派のペシミステックな思想を規定しているのが『啓蒙の弁証法』であり、そしてその著作がアドルノの主導の下で書かれているゆえに、ホーネットは根底に流れる「諦念」を持ち込んだ責任をアドルノに帰する。啓蒙＝文明化の過程というものは、外的自然の処理＝支配の可能性の増大の過程であり、それはそもそも人間自身の内的自然（衝動、欲望等）の抑圧の増大と表裏をなすもので、経験的に全体主義やファシズムに見出せる人間自身に対する社会的支配の形態は、その自然支配の派生形に過ぎない。こうした歴史哲学は、彼らの方法論にも影響を与える。社会科学的な研究を含んだいかなる学問的認識をも彼らは、文明史の根源に端を発する物象化の過程を促進するための要素と理解する。こうした理由から、ホルクハイマーが抱いた学際的唯物論の構想は、経験的な学問との共同作業を前提とする限り、放棄されざるを得ない。

ホーネットの批判の中心は、日常的な行為によって構成される「社会的なもの」が、アドルノの歴史哲学において欠如していることに絞られる。アドルノは、社会内部の現象を全体的に自然支配の過程の派生態と捉える。そして自然支配的な合理性の進展を一切の物象化過程と見なす。その結果として、人間によるどんな進歩的活動も人類の自己否定の手段となってしまうのだ。彼の歴史哲学は、いかなる強制にも基づかない、ある「合意」の結果としての社会的支配の可能性を締め出す。抑圧的ではない構成員の協同の解釈過程によって可能となる認知的で道徳的な総合的行為の次元を、ここでホーネットは念頭に入れている。そして、そのフィルターを通じて社会の諸集団は、社会的な負担の不公平を抱える既存の制度や社会的支配への「合意」を可能にするのである。アドルノにおいては人類史における行為概念が、目的合理的な「社会的労働」のみに制限されている。仮にアドルノが日常的な言語的相互行為の潜勢力に気付いていたなら、もっと広範な領域にわたる「近代の理論」を描けたはずだ、とホーネットは見る。アドルノができることと言えば、芸術作品のもつミメーシス的な宥和の力を借りて、人間自らをも含めた自然との和解を目指すことぐらいである。では、その対案となるような豊かな行為概念はどんなものか。ホーネットはその答えをフーコーの中に見出すのだろうか。

ホーネットによれば、フーコーの仕事[3]は、前期の「考古学（Archäologie）」、後期の「系譜学（Genealogie）」とに分けられる。前

期の「考古学」は、次のような意味から伝統的な人間諸科学の批判を目的とする。つまり、従来、伝統的な主観的哲学とその概念を援用してきた人間諸学科は、歴史というものを「単体の主体」による連続的な構成過程として捉え、人間の意味付与的な作用を歴史と世界の中心に捉えてきた。しかし、そうした思考パターンは、概念にはまりきれない異質なもの、多様なものを排除せざるを得ないのである。こうした認識は、非同一性、非全体性の擁護を目指す点で、アドルノと共有されていると言える。十六世紀から今日までいたる刑法罰の拷問制度から監獄制度への移行、軍隊から工場、更には病院や学校まで含んだ人間の身体の規律的施設の制度化、そこに見られる徹底的な合理化の分析が、『監獄の誕生』の意図である。フーコーによれば刑罰手段からの拷問の排除とその他の規律化＝訓練化は共に、権力による支配効果の向上を目論んでいる。解放の方向を指さしながら人間を隷属へと導いていく、『啓蒙の弁証法』での文明化の課程の記述と、人間を善きものへと変えよう、という一見ヒューマニズム的な努力が、規律化＝訓練化の課程を通じて支配へと転化するという『狂気の歴史』、『監獄の誕生』での暴露の内容は、ほぼ同一の内容を語っている。そして、その両者の中にホーネットは、近代化の過程を捉えるうえで自らをアポリアへと導いてしまうような一面化を見いだすのである。

フーコーが主観哲学的な概念を排除する際に範をとるのが、記号論的構造主義である。彼は「民族学（Ethnologie）」的に、自分の所属する社会に対して自分を外的な観察者として外化（Verfremdung）し、現象を解釈の及んだ文書（Document）としてではなく、ありのままの記念碑（Monument）として取り扱う。しかし、そこで既にフーコーは、一種の記号論的存在論に陥ってしまっているのだ。つまり、実際の社会の生活連関が意味的なものから自由であるかどうか、という問題を、意味作用から自由な記号の秩序に適合するカテゴリーを歴史記述に用いることで決定済みにしてしまうのである。ホーネットによれば、そうした誤解は、歴史的文書に沈潜する意味連関が「単数の主体」によってではなく、「複数の主体」の相互行為の帰結として理解されたならば、免れたはずなのである。フーコーは対話的行為の参加者としての相互主観的な「主体」もろとも、「主体」を放棄してしまうのである。この誤解が「考古学」の構想を最終的に行き詰まらせるのである。『知の考古学』での分析は、個々の言明（Aussagen）に先立って存在し、それらをある一つの体系的秩序へともたらす構成規則として、更には言明の主体を単なる遂行器官にしてしまうような、言表に対して向けられていた。だが、既述の誤解によってその言表（Diskurs）の定義は首尾一貫しないものになってしまうのである。

言表は、支配的機能を持つという特性を先鋭化されて、後期の「系譜学（Genealogie）」へと、継承される。当初、言明の体系的な結合として考えられていた言表も、一方では支配の関心に貢献する、制度的技術と認知的過程との結合を生む実践的な手段、他方では、支配への関心によって生みだされ加工される媒体、という機能を「考古学」で付加されていた。フーコーは知の生産と支配の遂行を同一

の過程の表裏と理解し、制度史の意図と概念史の意図とを「系譜学」で結び付けようとするのである。この構想に対してホーネットが下す判断は、「啓蒙の弁証法のシステム理論的解体」である。

ホーネットは、規範的確信や文化的志向、個人的な欲求、経済活動、そして権力闘争までが、このフーコーの分析においてはすべて権力の興隆（Machtsteigerung）の単なる環境世界、又は派生物へと貶められている、と批判する。十八世紀において支配権力は、自己を維持するために、人口の増大と生産力の発展という二つの社会問題を解決せねばならなかった。フーコーは身体的規律化の普遍化の必然性をこれらの問題の解決と結び付ける。つまり、社会の制御能力の増大を可能とする監視システム、個人の遂行能力の増大とそれに伴う経済的な収益の過程を可能とする身体的規律化、この二つの権力の戦略に従って成立した制度的な網は、ただ既述の社会問題の解決のために編まれたものなのである。ホーネットは、こうした社会の構成の記述に、フーコーの理論のすべてがそこに結び付けられるシステム理論的な確信を見い出すのである。

西欧の合理化が持つ二義性、支配と科学の内縁関係、社会秩序の全体的な強制、これらを暴露したという点で共通するものの、システム理論的な様相を呈したフーコーの権力理論はアドルノの歴史哲学とは根本的に異なっている。自然支配の過程のモデルに従って、文明化の過程の内部で社会的生産の次元が、社会的支配と個々の人格形成という次元を従属させることにアドルノが批判を加えるのに対して、フーコーは社会的支配の次元での権力の興隆という過程のみに目を向けて、それを社会の歴史として記述するのだ。アドルノの諦念に包まれた批判が向けられた歴史の過程は、フーコーの権力理論にとっては社会的な権力の興隆の客観的な現象となるのである。

以上のようなアドルノ批判とフーコー批判を辿る限りで感じられることは、この本のタイトルやテーマから期待される内容と実際の内容とが随分異なっていることだ。『権力の批判』と題され、アドルノとホルクハイマーを経て、フーコーとハーバマスへと継承される問題がテーマであるならば、当然アドルノらにはない社会理論をフーコーの権力論、ハーバマスの対話的行為の理論の中に求めることが、本著の目標であろう。それならば、アドルノ＝ホルクハイマー対フーコーという対決が見られるはずである。しかし、本著からそうした図式はまず読み取れない。見いだせる対決は、ハーバマス対アドルノ＝ホルクハイマー、ハーバマス対フーコーという対決しかないのではないか。読者にとって更に興味奮いのが、ホーネットとハーバマスという対決であるのに。

ヴェーバーから西欧マルクス主義陣営にいたるまで、文明史における行為の合理化の基準はもっぱら目的合理性であった。しかし、ヴェーバー自身「宗教社会学論集」で西欧の合理化を語る場合、彼が念頭にいれていたのはもっと広範な合理性概念ではなかったか。[4] ハーバマスの七〇年代以降の「コミュニケーション論的転回」の端緒はそうした問いであった。ハーバマスは社会を、対話的行為の遂行を通じて再生産され、文化、社会、人格の三つの部分に構成され

る生活世界と、目的合理的行為を通じて社会の物質的再生産の遂行を担うシステムとの二つの部分とに分けて考える。そして、資本主義的生産と官僚制的行政というサブシステムは、ハーバマスによれば、元来それとは対極をなす生活世界の合理化によって生じた負担を免除するために、近代において生活世界から分離されたものなのである。[5] それゆえハーバマスにとって、一方で社会を一元的にシステムへと還元してしまうことも、他方で社会から相互主観的な対話的行為を締め出すことも、社会理論としては失格なのである。

これがハーバマスが他の理論に批判を加えるときの「採点基準」であり、ホーネットがアドルノ＝ホルクハイマー批判、フーコー批判を通じて忠実に守っているところのものである。そのため本著におけるホーネット自身の学派内での独自性ははっきりしていない。ホーネットはアドルノ批判、フーコー批判においてハーバマスに先駆けており、批判の可能性を探る感受性は評価できよう。だが、論敵の視点すら批判的に受容するハーバマスの知的柔軟性を考慮すれば、理論的な道具立てを彼から借用している限り、いつかは取り込まれ、単なる先行研究に貶められることは予測可能なことだ。周囲のアドルノ批判を刺激した、ハーバマスの「フランクフルト学派」離れという現象は、「学派」の自己解体をも辞さないような自由な「批判」の潜勢力を彼自身が継承していることの現われである。同様にホーネットが「ハーバマス学派」の一員である前に、「批判理論」の継承者であるならば、きっとハーバマスへの内在的な批判も可能なはずであり、それを我々は期待したい。きっと、その自己解体をも厭わぬ乗り越えの連続が「批判理論」の宿命でもあろうから。

注

(1)『近代の哲学的ディスクルス』におけるハーバマスのフーコー批判においても、戦略的な概念の切り詰めや一面化が見られる。例えば、フーコーの言表概念への彼の（ホーネットもそうだが）説明からは、言表＝パラダイムというような印象を受ける。また、フーコーをルーマン流のシステム機能主義者の先駆として追い込んでいくような議論の方法は決して生産的とは思えない。

(2) Vgl. Max Horkheimer / Theodor W. Adorno, *Dialektik der Aufklärung*, Fischer, 1988.

(3) M・フーコーの著作に関しては、次の邦訳を参照した。『監獄の誕生』（田村俶訳、新潮社、一九九〇年）、『狂気の歴史』（田村俶訳、新潮社、一九八四年）、『言葉と物』（渡部一民、佐々木明訳、新潮社、一九八四年）

(4) (5) Vgl. »Max Webers Theorie der Rationalisierung«, »Zweite Zwischenbetrachtung: System und Lebenswelt« und »Schlußbetrachtung: Von Parsons über Weber zu Marx«, in: J. Habermas, *Theorie des kommunikativen Handelns*, Suhrkamp, 1981.